

知的障害児のサマースクールに関する一考察（その4）[†]

— 運営体制を中心に —

池本喜代正*・中村 尚子**・大金 律子**

宇都宮大学教育学部*

宇都宮大学大学院教育学研究科**

知的障害児のための「サマースクール in 宇都宮」は、昨年夏 4 回目の実施となり、今回は中学生を対象とした「サマーチャレンジ in 宇都宮」も同時期に開催した。参加者数は、小学生 30 名、中学生 11 名の参加である。2つの活動の運営を行うため、これまで以上に組織運営が複雑になった。そこで、今後の運営のために、実行委員会の組織体制や実際の活動に関する実行委員会の対応について検討し、組織運営のあり方について考察することとした。運営自体は、4年の積み重ねの成果もあり、流れもスムーズになってきたと認識していたが、毎年実行委員会のメンバーが大きく変わることによる引継ぎの不十分さやボランティアへの説明不足の面もあることが明らかになった。また、サマースクール、サマーチャレンジという2つの活動を実施する意義と課題も明らかになった。

キーワード: 知的障害児, サマースクール, 実行委員会, 運営体制

はじめに

2000 年から障害を有する子ども(以下、障害児)を対象としたサマースクールを実施し始めて、昨年で4回目となる「サマースクール in 宇都宮」(以下、サマースクール)も無事終了することができた。最初は試行錯誤で企画・運営してきたサマースクールであるが、回数を重ねるに従って見直しを持ち、以前よりは組織的な運営になってきたように思える。しかし、昨年より中学生を対象とした「サマーチャレンジ in 宇都宮」(以下、サマーチャレンジ)も同時期に実施することとなり、運営は複雑になった。ボランティア組織による行事の企画・運営は、学校における行事の企画・運営と比べるならば、①企画のためにボランティア

が集まる時間の調整が難しい、②メンバーが変わることが多くて、引継ぎが困難である、③対象児が限定されていないため、活動内容の選定が難しい、④ボランティアが教えることのプロではないため、児童への対応への不安がある等の課題を有している。一方、学校教育の一環としての教育活動でないため、活動内容を柔軟に組むことができる、マンツーマンに近い形で個別的にきめ細かな指導ができるなどのメリットもある。

本稿で、サマースクールの組織運営について検討するのは、今後のサマースクールの運営方法の改善を図るためでもあるが、他のボランティア活動にとっても参考になると考えるからである。

そこで、本研究はこれまでのサマースクールの運営活動をベースとして、ボランティアによる活動の運営について考察を行うことを目的とする。

[†] Kiyomasa IKEMOTO*, Naoko NAKAMURA** and Ritsuko OHGANE**: A Study on the Summer School for Children with Intellectual Disabilities in Utsunomiya (4)

* Faculty of Education, Utsunomiya University

** Graduate School of Education, Utsunomiya University

1. 本年度の運営について

(1) 実行委員会の組織

サマースクールの実行委員会は、例年会場の予約をした5月に発足している。昨年は4月末に実行委員(スタッフ)の募集を行い、5月7日に第1回実行委員会を開いた。実行委員として参加した者は、22名であった。第1回のサマースクールから実行委員は3年生を中心として組織してきている。これは、4年生は5月に養護学校での教育実習(3週間)があり、また教員採用試験の準備もあるため、実行委員会には入れていない。これまでの実行委員会のスタッフの構成を、表1に示す。

表1 実行委員会スタッフの構成

| | 院生 | 3年 | 2年 | 社会人 | 計 |
|-------|----|----|----|-----|----|
| 2000年 | 1 | 7 | 2 | 4 | 14 |
| 2001年 | 1 | 4 | 11 | 2 | 18 |
| 2002年 | 4 | 10 | 9 | 2 | 25 |
| 2003年 | 5 | 9 | 6 | 2 | 22 |

この表にみるように、2年と翌年の3年の人数がほぼ同数であるのは、同メンバーが2年連続でスタッフになっていることによる。ここであわせて、サマースクールに参加したボランティアの構成についてもみておこう。なお、このボランティアの数には、スタッフも含まれている。

表2 ボランティアの構成

| | 院2年 | 院1年 | 4年 | 3年 | 2年 | 1年 | 社会人 | 高校生 | 計 |
|----|-----|-----|----|----|----|----|-----|-----|----|
| 00 | 1 | 0 | 0 | 9 | 7 | 9 | 3 | 1 | 30 |
| 01 | 1 | 2 | 8 | 13 | 11 | 6 | 4 | 1 | 46 |
| 02 | 1 | 3 | 7 | 13 | 12 | 16 | 9 | 0 | 61 |
| 03 | 2 | 6 | 12 | 11 | 10 | 11 | 13 | 1 | 66 |

ボランティアにおいても、連続で参加している

者が多いのが特徴である。また、社会人の数が年々増加しているのは、OB・OGが参加しているためである。このように毎年参加する者が多いことは、サマースクールの魅力の反映であると考えられる。

実行委員会の委員長は、最初の2年間は大学教員が担当し、中心的に進めたが、第3回目からサマースクールの経験を有する大学院生が委員長役を担当している。教員は代表という形で、一般的な総括を行い、実行委員長が中心となって活動内容の企画立案などにあたっている。運営組織の全体図は、図1の通りである。

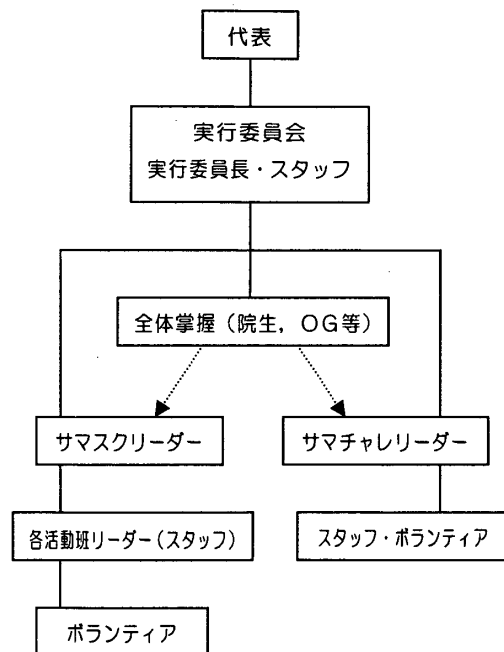


図1 「サマースクール, サマーチャレンジ in 宇都宮」運営組織図

(2) 実行委員会の活動

2003年度の実行委員会が行った活動内容を、図2に示す。実行委員会は、基本的に水曜日の昼休みに実施することとした。それは、水曜日の午後は講義があまりないため、時間を延長して実施することが可能であるためである。実行委員会では全体的な打ち合わせが中心であり、各活動別の打ち合わせや教材の準備など具体的な作業は、関係するスタッフが集まって行った。そうし

| | | 運営・事務的なこと | 子どもの活動にかかわること |
|------|--------------|-----------------------|--------------------|
| 5/7 | 第1回実行委員会 | メンバー顔合わせ, 今後の予定の決定 | |
| 5/20 | 第2回実行委員会 | ボラ説明会係分担案作り | 活動内容(日程)の検討 |
| | | ⋮ | ⋮ |
| 5/28 | 第3回実行委員会 | 準備の進行状況 | |
| | | ⋮ | ⋮ |
| 6/11 | 第4回実行委員会 | 準備の進行状況 | 具体的なプログラムの検討 |
| | | ↓ | ⋮ |
| 6/18 | ボランティア説明会 | スタッフ・ボラ名簿作成 | |
| | | ↓ | |
| 6/21 | 第5回実行委員会 | 募集要項, 申込用紙, 領収書の準備 | 経過報告 |
| | | ↓ | ↓ |
| 6/28 | 保護者へ募集要項を配布 | | |
| 6/29 | 参加者受付(7/4まで) | 参加者名簿 班編成案作り | しおり原稿分担 しおり作成準備 |
| | | ↓ | ↓ |
| | | 名札作成 | |
| | | ↓ | |
| 7/9 | 第6回実行委員会 | 班編成検討 班編成原稿作り | 連絡帳作成 |
| | | ↓ | ↓ |
| | | 個人面談用紙準備 | |
| | | ↓ | |
| 7/16 | 第7回実行委員会 | 提出 | 連絡帳印刷 |
| | | ↓ | ↓ |
| 7/19 | 保護者説明会, 個人面談 | | しおり製本 |
| | | | ↓ |
| 7/26 | 第8回実行委員会 | 実地踏査 ボラ事前説明会役割分担作り | 教材準備 |
| | | ↓ | ↓ |
| | | 配車 事務用品, 救急箱準備 | |
| | | ↓ | |
| 7/30 | ボランティア事前説明会 | | |
| | | 準備 | |
| 8/1 | 第9回実行委員会 | 各分担, 最終確認 | |

図2 実行委員会の作業日程

た作業は学生にとって時間的に負担ではあるが、教材の工夫等は将来の教師として貴重な経験になると考える。

2. サマースクール、サマーチャレンジの活動と運営

(1) 全体掌握の意義と内容

参加児童の活動班に振り分けられる学生ボランティアの他に、それに属さないフリーな立場でサマースクールの運営活動をする立場が「全体掌握」である。この担当には主に大学院生やOG（その多くは教員）があたっており、人数は1日に4～6名ほどである。仕事の内容は、①1日の活動の全体進行役、②タイムキーパー、③おやつ、水分補給の準備④その日の活動の様子を報告する『サマースクール・サマーチャレンジだより』の発行、⑤救急の場合の対応、⑥食事の際、テーブル設定などの会場準備、⑦その他に突発的に発生した仕事や活動班において人手が足りない時のヘルプ等である。サマースクールにおいては、急な変更や準備の欠落がどうしても発生してくる。そのようなとき臨機応変に対処し、活動中の緊急事態にも対応するには「全体掌握」の存在が不可欠であるとともに、運営において重要な役割である。また、経験が少なく、子どもへの対応に困っている学生ボランティアに対して、経験を積んだボランティアとしてヘルプに入り、対応の仕方を実際に示すことにより、経験の少ない学生にとってのスーパーバイザー的な役割も果たしている。実際、毎年実施後のアンケートにおいて、先輩の子どもへの対応から学ぶことが多かったなどという感想が寄せられている。

(2) サマースクールの運営

1) 活動のねらい・日程・内容

サマースクールは例年4日間実施している。開催に当たってのねらいは、「i.頭と体と手を充分

に使う、運動・手仕事や日常生活動作をしっかり行う、ii.一日の生活・各活動の見通しを持って、できるだけみんなと一緒に行動する、iii.友達やボランティアと豊かな人間関係を育む」の3点であった。また、指導上の留意点として、「励まし、認め、自信を持たせる、具体的な分かりやすい言葉で、やるべきことを伝える、始めと終わりをはっきりさせて、子どもに見通しを持たせる、自由な時間と指導の時間のメリハリをつけて対応する」の4点が挙げられている。4日間での主な活動内容は、表3の通りである。これらの活動内容は、実行委員会においてねらいのiに基づいた視点で企画された。参加児童の実態に合わせた細かな配慮が必要とされるため、それぞれの担当スタッフが打ち合わせを重ねて準備した。

表3 サマースクールの活動内容

| | 1日目 | 2日目 | 3日目 | 4日目 |
|----|------------|-------|------------|------|
| 午前 | ダイナミックリズム等 | ハイキング | ダイナミックリズム等 | 調理 |
| 午後 | 制作活動 | | | お別れ会 |

2) 活動体制

参加児童の活動班は学年縦割り式の編成とし、1年生から6年生までがバランスよく含まれるようにした。加えて、障害種が偏ったり、多くの介助を必要とする児童がひとつの班に集中しないよう考慮した。活動班のリーダーとして、活動内容を十分に理解している実行委員会スタッフをリーダーとして固定配置するとともに、対応の難しい児童に対しては以前からかわりのある学生や経験の多い学生を担当にするなどの配慮も行った。また、すべての児童にマンツーマンでかわかることを基本とした。そのため、参加日数が制限されるボランティアがいる場合は複数のボランティアで4日間をつなぐといった調整が必要であり、場合によっては日によって入る班が変更になることもあつ

た。子どもの側から見れば、日によって自分と関わるボランティアが変わることとなった。

調理活動、制作活動、ハイキングの際はまた別のグループ編成をしている。マンツーマンといっても現実的には特定のボランティアが子どもに付くという形では実施できていない。児童にかかわるボランティアが変わることについては、4日間の活動を通して同じボランティアに対応してほしいといった保護者の要望も挙がっている。ボランティアの子どもへの付き方については、今後の検討課題である。

(3) サマーチャレンジの運営

1) 活動のねらい・日程・内容

サマーチャレンジは8月5日から7日までの3日間行われた。開催に当たってのねらいは、「i. 体を十分に動かし、自分の体力・忍耐力にチャレンジする、ii. 集団行動を通して協調性を養い、仲間づくりにチャレンジする、iii. 経験を豊かにし、中学生らしい自立的な生活にチャレンジする」の3点であった。また、指導上の留意点として、「・励まし、認め、自信を持たせる、・分かりやすい言葉でやるべきことを伝える、・一日の流れをはっきりさせて、子どもに見通しを持たせる、・自由な時間と指導の時間のメリハリをつけて対応する」の4点を挙げている。

主な活動は以下の表4の通りである。会場近くの森林公園を利用し、登山やサイクリング、バーベキューなど、体力を必要とするものを多くした。これは、夏休み中に保護者だけではなかなか経験させられないようなことを経験させてあげたいという思いからである。

表4 サマーチャレンジの活動内容

| | 1日目 | 2日目 | 3日目 |
|----|--------|-----|---------|
| 午前 | サイクリング | 登山 | お別れ会の準備 |
| 午後 | バーベキュー | | お別れ会 |

2) 活動体制

サマーチャレンジは、対象が中学生で参加者数も11名であったことから、マンツーマンでの対応は必要ないと判断し、サマースクールより少ない規模のスタッフ・ボランティアを配置し、生徒の班分けも行わない方針とした。また圧倒的に男子生徒が多かったことや登山での対応を考えて、なるべくボランティアも男子学生が多く入れるよう配慮した。実際には11名の参加児に対してのべ14名、1日7～8名のボランティアが入り、活動はスムーズに行われた。

3. アンケートに見る運営上の課題

スタッフ・ボランティア・保護者に対し、サマースクール実施後に質問紙によるアンケートを実施し、サマースクール・サマーチャレンジの事前準備や当日の進行等の運営体制、子どもや保護者への対応について、意見を聞いた。ボランティア(スタッフを含む)の回答数は37(回収率56.1%)、また保護者の回答数は30(回収率75%)であった。

(1) 事前準備に関する評価と課題

まず、スタッフとボランティアに対し、事前準備についてアンケートをとった結果が、表5および図3である。

表5 ボランティアによる事前準備に関する評価

| | 十分 | まあまあ | 不十分 | 無回答 |
|------|----|------|-----|-----|
| 事前説明 | 8 | 22 | 4 | 3 |
| 企画 | 24 | 11 | 1 | 1 |
| しおり | 17 | 15 | 1 | 4 |

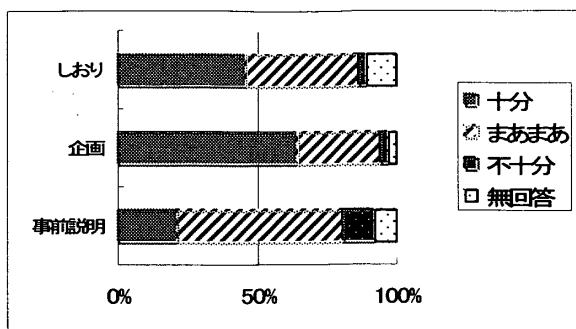


図3 ボランティアによる事前準備に関する評価

サマースクール開催までの事前準備に関しては、ボランティアへの事前説明、活動内容の企画、しおりの内容、の3項目について、感じたことを「十分・まあまあ・不十分」の三択で回答を求めた。3項目とも、「十分」「まあまあ」を合わせた評価が8割以上となっているが、ボランティアへの事前説明に関して、「不十分」とする意見が複数あったことに注目したい。実行委員会としては、ボランティア説明会を早期から開く必要性を意識し、前年度は開催9日前に1度だけだった説明会を、開催の約1ヶ月半前にあたる6月中旬と、開催5日前の7月末の2回にわたり行った。それでも事前説明が「不十分」と感じられる意見として、「ボラへの説明会をもう少し早い段階で設けられればよい」(参加回数4回/ボランティア)、また、「ボラを含め、みんなで集まる時間を作って話し合えたらいい」(参加回数3回/スタッフ)という記述があった。スタッフとボランティアとが顔を合わせて話し合う時間を、参加者がより必要と感じていることが指摘できる。このような運営体制の改善を求める意見は、初めて参加した学生ではなく、前年に参加経験がある者から出されていることに注目したい。授業や試験等と重ならないよう配慮して事前説明を組むと、時間設定に難しさはあるが、上記のような意見を次年度に生かしたい。

(2) 当日の進行・対応に関する評価と課題

次に、スタッフ・ボランティアに対しサマースク-

ル・サマーチャレンジ当日の進行と対応に関するアンケートをとった結果が、表6および図4である。

表6 ボランティアによる当日の進行・対応に関する評価

| | 十分 | まあまあ | 不十分 | 無回答 |
|------|----|------|-----|-----|
| 対応 | 20 | 15 | 1 | 1 |
| 全体進行 | 26 | 10 | 0 | 1 |

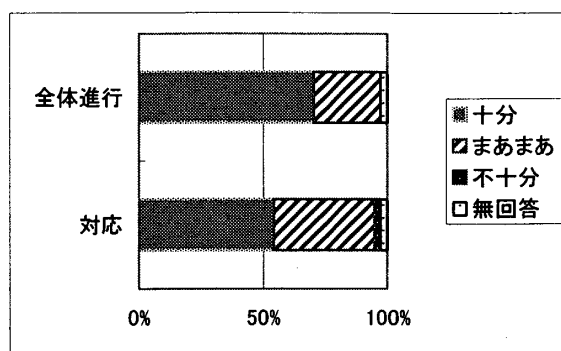


図4 ボランティアによる当日の進行・対応に関する評価

項目は、全体進行の仕方と、子どもや保護者への対応の2点である。ともに、「十分」「まあまあ」を合わせた評価が大多数を占める。ただ、子どもや保護者への対応についての自由記述の部分を見ると、例えば保護者との重要な接点である連絡帳に関し、「連絡帳を書く時間が足りなかった」との意見が複数寄せられた。記録を書く時間は昼休みの自由時間、おわりの会の時に限られており、確かに時間的に制約がある。

また、原則として子どもに対しマンツーマンになるようスタッフ・ボランティアを配置していても、当日になって学生のやむを得ぬ欠席や突発的事態等で、マンツーマンにできないケースが発生することにより、参加者には「ボランティアの人数が少ない」と感じさせることがあったかもしれない。開催当日の種々の事態に臨機応変の対応が求められることは必至だが、運営体制としては、フリーの立場で動ける人員をより整備すること等、参加者がより動きやすい体制を考えていくことが必

要になる。

(3) 保護者への連絡や対応に関する評価と課題

子どもや保護者へのボランティアの対応について、保護者を対象にしたアンケート結果が、表7および図5である。

表7 保護者による連絡や対応に関する評価

| | 十分 | まあまあ | 不十分 | 無回答 |
|----|----|------|-----|-----|
| 連絡 | 26 | 4 | 0 | 0 |
| 対応 | 24 | 5 | 0 | 1 |

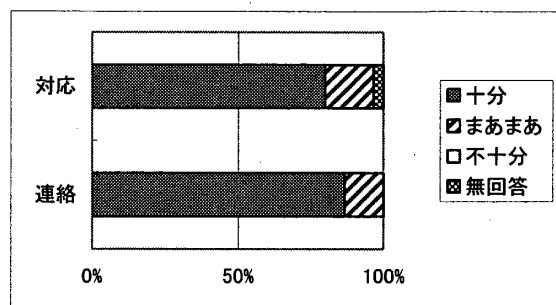


図5 保護者による連絡や対応に関する評価

質問項目は、連絡についてと、保護者への対応についてである。保護者からボランティアに対しては、「その日の様子や良くできたことをほめてくれてよかった」等の肯定的な意見が寄せられたが、連絡について、「個別の連絡は十分だったが、全体的な連絡は行き渡っていないところもあった」との指摘があった。細かな連絡に関して、特に初めて参加する保護者の方には分からない点があったとのことで、「初めての人でも分かるような説明(連絡)を徹底して下さると不安が小さくなる」との要望があった。しおり等で伝えきれない細かな連絡事項を、ボランティアにも保護者にも分かりやすく伝えることは、全体を指揮する運営側が十分配慮しなくてはならない課題である。今後、保護者・ボランティアに対する掲示板の設定やサマースクールだよりを活用した連絡周知の方法を検討したい。

(4) 活動内容に関する評価と課題

最後に、活動内容が子どもの実態にあっているかどうかを、スタッフ・ボランティアに訊いたアンケート結果が、表8および図6である。

表8 ボランティアによる活動内容に関する評価

| | とてもあっている | 大体あっている | あまりあっていない | あっていない | 無回答 |
|-----|----------|---------|-----------|--------|-----|
| 実態に | 6 | 27 | 0 | 0 | 4 |

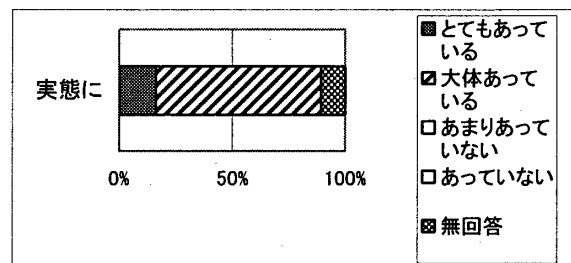


図6 ボランティアによる活動内容に関する評価

参加していた子どもたちは、特殊学級の児童もいれば養護学校の児童もおり、またその障害種、発達段階や特性に個人差が大きい子どもたちの集団である。サマースクール以外の療育的活動に参加したことのある子どもたちが多いため、子どもの実態を事前に把握しており、企画段階でも子どもたちのイメージを思い浮かべながら実態を考慮して活動内容を組んでいる。そのため「あまりあっていない」「あっていない」とする意見はなかった。ただ、より個人に即して見ると、例えばダンスで、曲のテンポが速く、「遅れの重い子にはふ振り付けは理解できなかった様子」、あるいは「できる子にレベルの低いことをやらせるのもよくないし、できない子に高いことを要求するのも難しい」と、学生側も様々な実態の子どもがいる中での集団活動の難しさを実感していることは否定できない。

活動内容に関し、保護者の側からも難しいと思う活動として、「速いリズムや体力が必要なものは苦手」「足の不自由さから、ハイキングが少し難しいと感じた」という意見があった。運営側としては、子どもたちに過度のストレスを与えぬよう配慮しつつも、その場だけの楽しい活動ではなく、子どもたちの発達を促すような療育的活動をしていきたいとの願いがある。ただ、子ども達を見ると、ボランティアの支援を通し活動をやりとげて、日々の中でも成長を見せる一方で、保護者のアンケートから、「自分の力以上にがんばった分、家では不機嫌な感じが多かった」との一面も浮かぶ。サマースクールの活動を楽しみにしている子ども達や、ぜひ来年も実施してほしいという保護者の声に応えていくためにも、活動内容の精選はもちろん、実行委員会でのスタッフ同士の話し合いや、ボランティアへの説明を通し、支援する側が活動のねらいについて十分な共通理解をもつことが大切である。プロではないスタッフ・ボランティアも、何を目的として活動するのかという視点をもった上で、子どもに接し、保護者の意見に耳を傾けるようにしていきたい。

考察

ここでは、サマースクール運営上の課題について、「サマースクール in 宇都宮」のモデルとなった「サマースクール in 函館」の運営組織と比較しながら考察する。

「サマースクール in 函館」は、北海道教育大学函館校障害児教育専攻を中心に1997年から開催されているサマースクールである。小学生から高校生まで約100名の知的障害児と、学生・社会人等のボランティア約300名が参加する大規模なものであり、実行委員会のメンバーだけで80名を越える。その組織は宇都宮に比べ各分掌が完成されており、さらに系統づけられるスタッフの立場が明確なものとなっている。その一方で、

課題点として「実行委員の不足」が挙げられている。「サマースクール in 函館」ではこれらの課題に対し、①実行委員の募集を積極的に行う、②実行委員会の中で更にまとめ役となる“チーフ”を院生や4年生でなく2・3年生に任せる、③院生や4年生を“学部統括”として配置し、2・3年生のチーフをサポートする体制を作る等の解決策を講じた。その結果、「連携がうまくいかなかった」、「情報の共有の難しさ」、「話し合いの機会が上手く持てず、下の学年に上手く仕事を回せない」等の反省点が生じたものの、今後のサマースクールの運営にとってよいきっかけになったとしている。

宇都宮でも、事前準備が少数の実行委員に集中してしまうことや、情報共有・共通理解の不足、連絡がスムーズでなかったことが反省点・課題として残っており、規模こそ違うもののサマースクールのような活動を運営するに当たって、類似した困難が生じていることがわかる。

また、サマースクールを準備する上でのスケジュールについても比較したい。「サマースクール in 宇都宮 2004」は第1回の実行委員会をその年の5月7日に開き、以後計8回の実行委員会を通じて準備を行ってきた。ただしこの実行委員会は、各係が準備の進行状況を報告し全体で確認するという役割が主で、実質的な準備は各担当者が独自に打ち合わせを重ねて行っている。一方、「サマースクール in 函館」では、実行委員会が発足する以前に、前年の11月から40名を超える準備委員会が始動している。準備委員会は実行委員の募集を行い、4月に第1回実行委員会を開催するまでにその土台を築く重要な役割を持っていると考えられる。また実行委員会において各委員の所属が決まると、実行委員会の集まりは各所属のチーフによる「チーフ会議」に切り替わる。ここでいう「チーフ会議」の規模及び役割が、「サマースクール in 宇都宮」の実行

委員会と等質のものといえるのかもしれない。

函館の例やアンケートで得られた結果を踏まえ、今後の「サマースクール in 宇都宮」の実行委員会において考えられる改善策として、①1・2年生や他学科の学生に対し、積極的に実行委員の募集を行う、②早い時期からの話し合いを持ち、明確な運営組織と確実な連絡ルートを作る、③ボランティアの早期の積極的な募集及び説明会の充実、④ボランティア全体の共通理解の徹底、⑤保護者への配慮の充実、を指摘できる。

おわりに

「サマースクールin宇都宮」も多くの学生の熱意、参加児の保護者の皆さんの多くの協力の下、今回で4年目を迎えることができた。年々協力者の輪も広がり、また子どもたちの参加希望者も年々増え、子ども・保護者のニーズも非常に高いものである。大学の教員・学生が中心となり行っているこの活動は、大学の地域貢献という点でも意義があり、また責任のある活動でもある。上述したように運営形態の整備や人員の確保など課題は多々あるが、来年度以降、より充実したサマースクールを成功させるために、運営体制を更に整備・充実させていきたい。

参考文献

- (1)池本喜代正・倉持純子・池本真佐子:知的障害児のサマースクールに関する一考察, 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 第24号, pp.172-185, 2001.
- (2)池本喜代正・中村尚子・池本真佐子:知的障害児のサマースクールに関する一考察(その2), 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 第25号, pp.169-179, 2002.
- (3)池本喜代正・小関幸代・田中宏美・橋本真知子・池本真佐子:知的障害児のサマースク

ールに関する一考察(その3), 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要第26号, pp.227-237, 2003.

- (4)北海道教育大学函館校'03 サマースクールin函館 実行委員会:ひろがれ!! サマースクール第7号(平成15年度北海道教育大学函館校「フレンドシップ事業」実施報告書), 2003.